

アントロポゾフィー看護

— その魅力と可能性 —

ヨーロッパ各地のアントロポゾフィー医学・看護に基づく、
ホリスティックな実践を行っているゼミナールや病院での体験から

伊藤 良子

要旨

人間をひとつの全体として捉えケアしてゆくホリスティックな考え方に基づく看護のあり方は、様々に試行錯誤され続けているが、ここではその一例として筆者が1985年から1990年にかけてドイツで体験した、ヨーロッパ各地で行われているアントロポゾフィー医学 (Anthroposophische Medizin) とアントロポゾフィー看護 (Anthroposophischen Pflege) のホリスティックな実践について紹介したい。

まず、このアントロポゾフィー医学及びアントロポゾフィー看護は、「シュタイナー教育」で世界的に広く知られ、また日本でも有名になったオーストリアの思想家ルドルフ・シュタイナー (Rudolf Steiner) が、友人の医師イタ・ヴェーグマン (Ita Wegman) と共に始めたもので、今日に至るまで発展し続けている医学・看護の信頼し得る傍流の一つである。

ここではヨーロッパ各地に存在するアントロポゾフィー医学・看護に基づく実践をしている病院やその教育機関である諸ゼミナールの中で、筆者が看護師や看護実習生または教員として、アントロポゾフィー医学・看護を学び働いた施設について、その概要とそこでの体験からの学びを紹介したい。

- I. アントロポゾフィー看護とその魅力
1. フライエス・ユージェントゼミナール イン シュトゥットガルト (自由シュトゥットガルト青年ゼミナール)
Freies Jugendseminar in Stuttgart¹⁾ (南ドイツ)

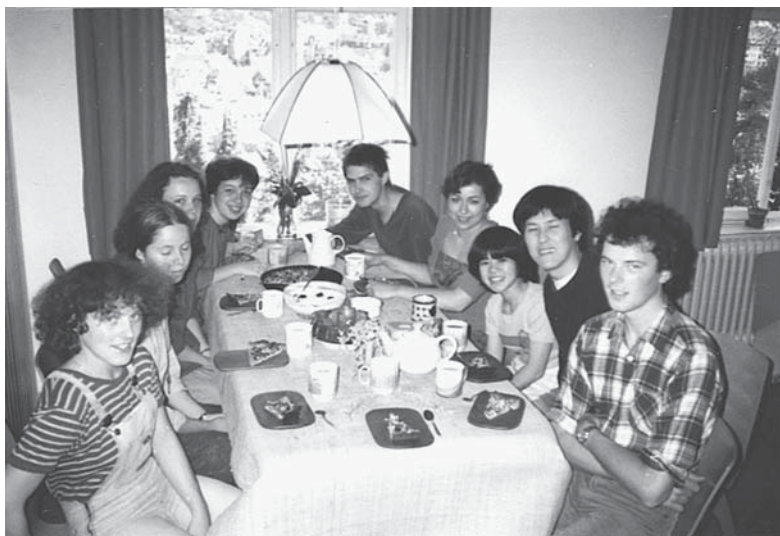
ここは若者の為の1年間の教育機関である。ここで学ぶ多くの若者達は大学や進学を選択を決定する前に、アントロポゾフィー全般の各領域についての基礎的知識や芸術を学ぶ。1年間のプログラムで3学期制。毎年約60人の学生を受け入れている。授業はシュタイナー教育の原理

に従って、毎朝90分間の講義が2～3週間単位で同じテーマが続く「エポック授業」をメインに、その後は各種の芸術的な授業が行われる。例えばコーラス・絵画・彫塑・線描画・演劇・言語形成・オイリュトミー (Eurythmie)・ボートマー体操 (Bothmer-Gymnastik)。加えて農作業や野外演習や共同作業も多く取り入れられ、多彩なプログラムが組まれていた。学生は全員寮での共同生活を行うことが原則とされて朝食を作る係りが一週間単位で順番に割り当てられ、定期的にミーティングが行われて学生による自治も重んじられていた。

ここでの生活では国際色豊かな学生・教員メ



ユーгентゼミナール 全景



クラスの仲間のバースデーパーティー

ンバーとの交流を通して人種を超えた繋がりが生まれ同時にそのような交流は個人的にはドイツ語の上達にも役立った。非常に良質な芸術的な授業の多さは感性をより豊かにし考え方を柔軟にしてくれたし、芸術の持つ教育力の豊かさを実感することとなった。

特に演劇での体験は大きく印象に残っている。演劇を作り上げてゆくプロセスでは、人や自分と向き合うような力が強く働き、それは自我の形成に大きく働きかける力や互いの信頼感を育てる力を持っているように思う。同時に智・情・意の人間の総ての領域にバランス良く働きかけて育成する力を秘めていると感じた。

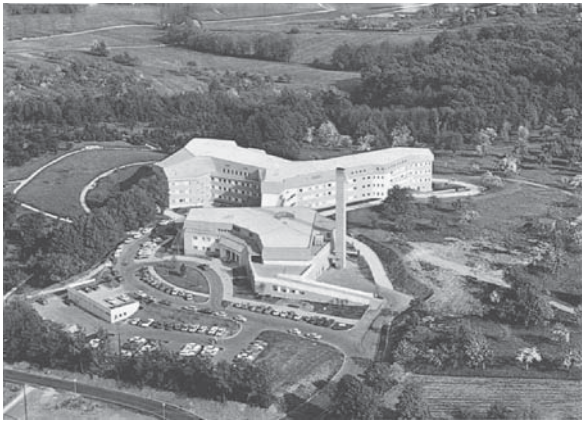
2. フィルダー クリニック (フィルダー病院)

Die Filderklinik²⁾ (南ドイツ)

フィルダー クリニックは、シュトゥットガルト郊外にある病床数約 200 床の総合病院 (1975 設立) である。私はユーгентゼミナールの冬期休暇を利用して、フィルダー クリニックの内科病棟でプラクティカント (日本で言う看護学生または看護助手の位置づけ) として 1 ヶ月間の就業を経験した。ユーгентゼミナールからの

紹介があり日本の看護師免許証の英訳もあった為スムーズに手続きが進み、食事・宿泊施設とアルバイト代が支給された。仕事の内容はハーブティーを淹れたり (飲用と湿布用)、湿布の後片付け、配下膳、下肢の浮腫に対してクワルク (酸味のないヨーグルトの様な乳製品) を用いた湿布や、様々なハーブティーで湿布を行う等であった。

ここで印象に残ったのはスタッフやクライアントと会話する時間がたっぷりであったことだ。これはスタッフの人員配置が比較的多いこと以外にも、ケアが湿布³⁾ やアインライブング (Rhythmische Einreibungen nach Wegman/Hauschka)⁴⁾ (アロマオイルをリズムカルに皮膚に塗擦するケア) などの、ゆっくりとクライアントと向き合っていくケアが日々の治療や看護の中に多く取り入れられていたことにも起因すると思われた。またクライアントは職員と共同の食堂で食事をとることもできた。特に印象的だったのは看護学生がゆったりと且つ楽しそうにスタッフにすっかり溶け込んで学び働いていたことである。プラクティカントである私の仕事への導入も、全て看護学生に任かされていたのには驚いた。しかし彼女たちはしっかりと見



フィルダー病院 遠景



クリスマスツリー

事にその仕事をこなしていた。また看護学生は、廊下でフルートを奏でたり歌を歌ったりクリスマスツリーの飾り付けを任されたりして、クライアントやスタッフを楽しませてくれていた。これも看護学生の役割の一つだった様だ。そんな自由で穏やかな雰囲気の中で学べる看護学生たちを良い意味で羨ましく思った実習期間であった。

3. フォルトビルドゥングスインスティテュート デス フェアバンデス アントロポゾフィシェス オリエンテールタア プフレーゲベルフェ (アントロポゾフィー援助職者継続教育研究所) (南ドイツ)

Fortbildungsinstitut des Verbandes anthroposophisch orientierter Pflegeberufe e.V.⁵⁾

ここは、看護師・介護師の国家資格取得者（加えて3年間以上の就業を経た者）を対象にした、継続教育のためのドイツ認定の教育機関である。看護・介護の場でリーダーとなれる人材の育成を目的とした《一年コース》と看護教員・介護教員養成の為の《2年コース》が設けられている。カリキュラム内容は、アントロポゾフィー全般、芸術（オイリュトミー・言語形成・絵画・彫塑）、

アントロポゾフィー医学及びアントロポゾフィー看護と看護ケア方法（湿布・アインライビング）について学ぶことができる。定員は1学年約20人で、期間は1年から2年を選択できる。しかしここでの学びは看護・介護職者の継続教育として国から経済的に補償されているため、殆どの学生が2年コースを選択していた。私も2年間学び、加えて終了後6ヶ月間をこの研究所に勤務させて頂いた。

授業はユージェントゼミナールと同様知的な面に偏る事無く芸術や共同作業が重視され、カリキュラムの一環として、農作業、園芸作業、教職員・学生総出の薪集めや、りんごジュース作り、カーニバル祭の運営、老人ホームでのイベントの企画と実施、近年日本でもその有機素材への信頼性から有名になった化粧品・医薬品メーカーのヴェレダ (Weleda) 社⁶⁾ やヴァラ (Wala) 社⁷⁾ への訪問学習や野外演習も多く取り入れられていた。アントロポゾフィー看護の継続教育機関であるという特徴から、授業の締め括りには湿布やアインライビングの試験も行われ、緊張したひと時もあった。最後に修士論文に当たる分厚いレポートを提出・発表するのは日本の大学院と同様である。私はこのゼミナールのカリキュラムの一貫としてこの後、ゾンネンホーフ (スイス)、ヘルデケ病院 (北ドイツ)、フリードリッ



湿布とアイロンブングの実技試験風景



教職員・学生総出で薪集めの共同作業中

ヒ・フーゼマン クリニック (南ドイツ), イタ・ヴェグマン クリニック (スイス) の4施設で働くこととなる。

4. ゾンネンホーフ (太陽の家)

Sonnenhof⁸⁾ (スイス)

アントロポゾフィー援助職者継続教育研究所の学習の一環として2年目前期の春のカリキュラムに組み込まれている6週間の訪問学習施設として、私はここを選択した。この施設は障害を持つ(魂の保護を必要とする)小学生から大人までの共同生活体(所謂障害者グループホームが、敷地の中に点在する形態)で、年齢や障害に応じて幾つかの小さなグループホーム形式で生活が営まれていた。

ゾンネンホーフの生活の大きな特徴の一つは、1日のリズムを創る工夫がされていることである。例えば、朝の集い(10分間の歌と祈り)／昼寝／夕の集い(20分間の歌と物語と祈りと歌など)が、一日のリズムを優しく自然に、しかしくっきりと形作っていた。子ども達は敷地内にある専用の小中学校に通い、障害に応じた教育を受けていた。また生活の中にも様々な治療プログラムが組み込まれ、食事への配慮やアントロポゾフィー医学・看護に基づいた治療やケアが行われていた。その種類は豊富で、例えば

治療オイリュトミー・音楽療法・合唱・ライアー・言語形成・乗馬療法・作業療法・手芸・体操・マッサージ・軟膏塗布・全身アイロンブング・部分アイロンブング・パック・足浴・入浴療法などである。

5. ゲマインシャフトクランケンハウス ヘルデケ (ヘルデケ共同体病院)

Gemeinschaftskrankenhaus Herdeke⁹⁾ (北ドイツ)

アントロポゾフィー援助職者継続教育研究所の学習の一環として2年目前期の夏のカリキュラムに組み込まれている6週間の訪問学習施設として、私はここを選択した。どこの病院で学習するかは自分で決め手続きを行うのだが、ウンターレンゲンハルト継続教育研究所の推薦があった為スムーズに手続きを進めることができた。

ヘルデケ共同体病院は北ドイツにある500床の州立総合病院(1969設立)である。勤務形態は日勤は2シフト製(シーソー勤務と呼ばれていた)で[6:30~13:45]のシフトと[13:45~20:00]のシフトがあり、[19:45~6:45]は夜勤がカバーしていた。この1日を2分した勤務形態は1週間単位でどちらかのシフトに固定される為に生活のリズムが創り易いのが



ヘルデケ共同体病院



病院周辺の散歩コース

有難かった。ただ州立の大きな病院である為アントロポゾフィー医学や看護に興味の薄いスタッフも多く、湿布やアインライプング等のアントロポゾフィー看護ケアの手法が取り入れられているにも関わらず、当時は、それらが与薬や注射の実施と同等に扱われている印象があった。クライアントの心身に「手を当てるようなケア」を十分に行うには、単にその手法を取り入れるだけではなくスタッフがそのケアの持つ意味を理解をすることや病院の規模も案外大切なのではないかという印象を受けた。

6. ヴィダークリニック (ヴィダー病院)

Vidarkliniken¹⁰⁾ (スウェーデン・イエルナ市)

夏期休暇の旅行でスウェーデンのイエルナ市を訪問し、ヴィダー病院の開設記念式典に参加した。当時、看護師が院長を勤める世界で初めての珍しい病院の開設記念という事で大変興味深く参加したことを覚えている。ついでにそのまま一週間程度の就業体験もさせて頂き福祉大国のウェルカム精神とゆとりを垣間見せて頂いた。

7. フリードリッヒ・フーゼマンクリニック (フリードリッヒ・フーゼマン病院)

Friedrich Husemann-Klinik¹¹⁾ (南ドイツ)

アントロポゾフィー援助職者継続教育研究所の学習の一環として、2年目後期の秋のカリキュラムに組み込まれている3ヶ月間の訪問学習施設として、私はここを選択した。フリードリッヒ・フーゼマンクリニックはアントロポゾフィー医学に基づく精神科病院で、就業中はここで提供されている精神医学入門講座も受講することができるように、週一日の授業が就業プログラムの中に組み込まれていた。精神医学入門講座の内容は多岐にわたり、アントロポゾフィー医学に基づく人間観、伝記と疾患像、疾患ごとの各論(神経症・躁鬱病・統合失調症・てんかん・脅迫症・ヒステリー・心臓ノイローゼ)、加えてこの病院で行われている各種の芸術療法(治療オイリュトミー・絵画セラピー・彫塑セラピー・言語形成セラピー・音楽セラピー・オイリュトミー)やアントロポゾフィー看護に基づくケアの方法(アインライプング・入浴療法)についても学ぶ機会を与えられた。

このカリキュラムでも分かる通りこの病院では非常に独特で多彩な治療・芸術療法・作業療法・看護ケアが行われており、ざっと見渡しても以下に列記する如くかなりの数となった。(治療オ

イリュトミー・グループオイリュトミー・言語形成療法・コーラス・グループ音楽療法・音楽（楽器）療法・絵画療法・線描画・彫塑・織物・糸つむぎ・乗馬・馬の世話・園芸・農場・散歩・読書・家事・マッサージ・足マッサージ・背部乾布摩擦・入浴療法）

8. イタ・ヴェーグマンクリニック（イタ・ヴェーグマン病院）

Ita Wegman Klinik¹²⁾（スイス）

アントロポゾフィー援助職者継続教育研究所の学習の一環として2年目の後期のカリキュラムに組み込まれている3ヶ月間の訪問学習施設での最後の学習を、私はスイスのイタ・ヴェーグマンクリニックで行った。ルドルフ・シュタイナーとイタ・ヴェーグマンによって開設された世界最初のアントロポゾフィー医学・看護に基づく63床の小さな病院（1921開設）で、スイスの小さな静かな町アーレスハイムにある。そこは完全受け持ち看護制でのゆったりと「手を当てるケア」を大切にする、小さな手作りの香りのする病院であった。イタ・ヴェーグマンクリニックの勤務形態は、日勤分割勤務（Geteildienst）と呼ばれ、日勤の看護師は[7:00～12:00]と[16:00～20:00]の2回に分かれて勤務していた。つまり間に[12:00～16:00]の4時間の長い休憩を挟んでの日勤である。勤務体制は19人のクライアントに16人の看護師（プラス常時2～3人の実習生や兵役免除生）という非常に恵まれたもので、完全受け持ち制で1人の看護師が2～3人のクライアントを担当するのが通常であった。担当する看護師は入院から退院まで受け持ちのクライアントに深く関わり続け、文字通りのプライマリーナーシングが行われていた。（勿論どちらかが自分に合わない相手だと気付くケースもあり、そのような時には申し出て組み合わせを変更する事が可能

であった）。分割勤務の長所は、朝と夕のクライアントにとって重要な時間帯（この時間帯にモーニングケア、イブニングケア、食事、湿布、アインライビング、処置など重要なケアが集中している）に1人の担当看護師が毎日一貫して関わられる為に、クライアントにとっては深い安心感のある親身で充実したケアが可能になっていた。そして正にそのことによって看護師にとっても大変魅力的で働き甲斐のある職場となっていた様だ。また担当看護師が連日一貫して関わるので申し送りがほぼ不要なことで時間的な余裕も生まれていた。勤務シフトの変更がほぼ無いことで看護師が自分の生活リズムを一定に保てる（週休2日制）ことも大きなメリットだった。ただ遠距離通勤者は午後の長い休憩時間に家に帰れない為、病院が提供する宿舎の一室で休んだり、買い物や習い事をしたりと自分の自由な時間を持てる反面、家庭での滞在時間が短くなるという短所もあった。また家庭を持つ看護師は夕食を家族と共に出来ない。しかしスイスでは昼食を大切に家族と過ごす（子供も学校から一旦帰宅する）風習も当時まだ残っており、それなりに受け入れられていたようだ。日勤が不在の時間帯である[12:00～16:00]は、1人の日勤看護師（プラス1人の実習生）が交代でカバーしていた。夜勤はクライアント20人に対して1人の看護師が2週間単位で連続勤務し、その後続く2週間の休暇を利用して長期旅行等を楽しんでいた。（夜勤は昼夜逆転ながら生活リズムは一定で、長い休暇も得られる為、若い看護師に人気のようなだった。病棟によっては夜勤専従看護師も勤務していた）

イタ・ヴェーグマンクリニックでの治療とケアは、クライアントと話し合いながら、西洋医学に基づいた医療とアントロポゾフィー医学に基づいた医療のバランスを上手く取って行われていたように思う。またその外にも様々な代替療法や芸術療法が豊富に取り入れられていた。



イタ・ヴェーグマン クリニック 2人部屋



国際色豊かなスタッフ

その一例を以下に列記しておく。治癒オイリュトミー・言語形成・絵画療法・彫塑療法・音楽療法・ライアー・乗馬・ハーブティー・アロマオイルでのマッサージ（全身・部分・特定部位）・アロマエッセンシャルオイルを使った入浴・湿布（あらゆる部位：腹部・足・胸部・背部・肝臓・腎臓等）・軟膏のアインライブング：特定部位（腎臓等）・アロマオイルでのアインライブング（全身、又は、部分）・足浴（ラベンダー・ローズマリー・西洋からし等）。

ナースステーションではドクターや看護師とのカンファレンスが、垣根のない雰囲気の中で行われていたが、それは自由な中にもお互いへの畏敬の念が感じられるものだった。休憩室ではティータイムがスイス特有の国際的で楽しい雰囲気の中で持たれていた。その他特徴的な設備としては、湿布準備室が確保されており、多様なエッセンス・オイル類が常備され、湿布用のハーブティーを淹れたり、使用した湿布の布類を洗濯・乾燥する設備も整っていた。

Ⅱ. アントロポゾフィー看護の基本的ケア方法とその可能性

前述したアントロポゾフィー看護の基本的ケアとしての「湿布」と「アインライブング」について、先ず簡単にその方法を紹介したい。

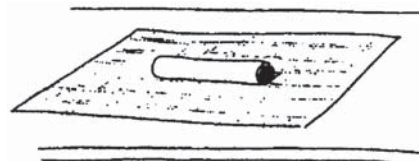
1. 湿布・足浴・入浴

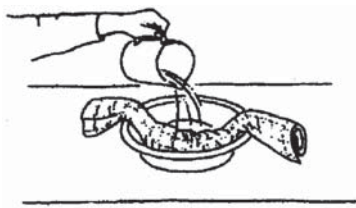
1) 種類：利用する薬剤・材料は多様で、およそ以下のようなものがある。

入浴剤（ラベンダー・ローズマリー・他多種類）・蜜蝋・各種エッセンス（アルニカ・ビンゲルクラウト・ボレッシュ・カリウム・硫酸銅・ネーデズース・ザウアークレー・蟻・キンセンカ・ニオイヒバ・ハイルエルデ・蜂蜜・生姜・ジャガイモ・ラインザメン・山葵・ユーカリ・他多種類）・オイル布（トリカブト・ユーカリ・カミレ・キャラウエー・ラベンダー・ソルムウリギノズム・軟膏布（鉛・金・銅・銀・錫・輝安鉍・ひよす・山藍・ザウアークレー他多種類）・からし・ソーダ・ハーブティー・スギナ・カミレ・西洋ノコギリソウ・キャラウエー・ニガヨモギ・キャベツ・レモン・タマネギ

2) 方法：方法も多岐にわたるが、一例として「背部湿布」の方法について簡単に紹介する。

- ① 内布〔湿布液を含ませて湿布時に直接肌に当てる木綿布〕を巻き物のように巻き、それを絞り布（絞る為の木綿布）で包む。（下図）¹³⁾



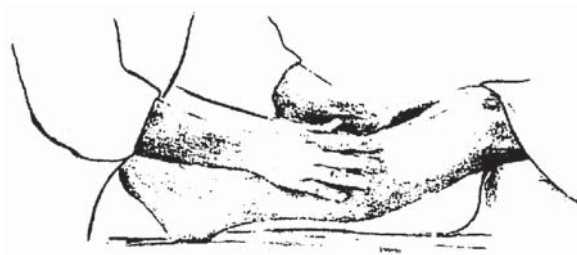


- ② ①を容器の中に置き淹れたてのハーブティー等の薬液を注いだ後、十分に絞る。(上図)¹³⁾
- ③ ②を開いて内布を取り出しクライアントの背部に当てる。その上を外布(水分を透過しないウール地)で巻き保温効果を保つ。必要時湯たんぽを添えて保温効果を高める。(下図)¹³⁾



2. アインライブング (アロマエッセンス入りのオイルの塗擦)

- 1) 種類：利用するアロマオイルの種類はアロマエッセンスとその調合の種類の数だけある。
- 2) 方法：アインライブングとは各種のアロマエッセンス入りのオイルを、特定のラインでリズムカルに軽く皮膚に塗り広げ擦り込むケアを指している。この際特に注意して欲しいのは以下の3点である。
 - ① しっかりと皮膚とコンタクトを取ることが大切で、それは皮膚の上を上滑りもせず、押しつけもしない十分なコンタクトである。(両右上図)¹⁴⁾
 - ② オイルを「単に肌に塗りつける」というのではなく「肌に乗せて肌を包み込む」感覚で行う。



- ③ 特定のラインで皮膚に塗り広げて擦り込む際には、目覚めた意識とリズムカルな動きで行う。リズムが体の生命力に働きかける。(下図)¹⁵⁾



3. 「手を当てるケア (湿布・アインライブング)」に内包される力

「手当て」という言葉に象徴されるように、昔から日本では「手を当てる」行為は癒しの原点であった。実はそのような行為に非常に近い性質を湿布やアインライブングは持っている。そこでここではそれらを総称して「手を当てるケア」と呼ぶこととする。この「手を当てるケア」の方法は既に紹介したように^{3) 4)}、いずれもクライアントの傍にゆったりと留まりながら行うものであり、その際クライアントの在り様にしっ

かりと心を添わせながら実施するという姿勢が求められる。こうした行為はバイタルサインを測定するとか与薬・点滴を行う等の行為より、清拭や足浴を行うといった行為に近いもので、クライアントに癒しをもたらす要素を多分に含んでいる。この「手を当てるケア」の持つ様々な可能性について最後に言及しておきたい。

- 1) 「手を当てるケア」は、クライアントの苦しみを心身共に和らげ、安らぎや喜びに導き、対話をもたらすための大きな可能性を秘めている：

湿布やアインライプングを行なった時に、先ず相手から返される反応は、殆どの場合「ああ…」という安堵の息と「気持ちがいい…」という喜びの言葉である。熱の高い時の氷枕や足先が冷え切って眠れない時の湯たんぽの心地良さを経験したことのある人なら、誰もが湿布の心地良さを想像することができると思う。またタッチングに癒された経験のある人であれば、アインライプングの心地良さをそこから想像することができるだろう。湿布の熱やアインライプングの皮膚へのタッチは、その素材そのものが癒しの要素を多分に含んでいるのである。

そしてその様な「手を当てるケア」が丁寧に心を込めて行われる時に、クライアントの苦しみが心身ともに和らげられ、安らぎや喜びに満たされる場面に私は数多く遭遇してきた。またそれをきっかけに苦しみの中にあるクライアントの心がほぐれ、深い沈黙が破られて対話が始まることも多い。この様に「手を当てるケア」はクライアントの苦しみを心身共に和らげ、安楽や喜びに導き、対話をもたらすための大きな可能性を秘めていると私は考えている。

- 2) 「手を当てるケア」は、看護師にケア提供者としての存在の意味を回復させてくれる：

医療現場で看護師がクライアントのもとを訪れて行う治療補助行為には、与薬・採血・処置

介助といった、どちらかと言えばクライアントに苦痛をもたらすものも多い。『今日はどんな痛いことをしてくれるの?』とクライアントにおどけられて『今日のメニューはですねえ…』と自虐的に答えたことのある看護師も多いのではないだろうか。人の安寧の助けとなる為にこの職業を選んだ看護師にとって、これは少し辛い現実であろう。

しかしそれに対して「手を当てるケア」は治療の一つでありながら、クライアントに苦痛を与えないばかりか、むしろ安らぎや喜びをもたらすことができる。日常的に自分が直接行う行為で、クライアントから喜びの感情や生きる力を引き出すことができる「手を当てるケア」は、多くの看護師にとって仕事の意味や仕事への魅力、やりがいを回復させるものとなるに違いない。

- 3) 「手を当てるケア」は、看護師としての資質や看護の質を育くみ耕す力を内包している：

既に述べた様に湿布やアインライプングのどのケアを行うにも、ゆったりとクライアントの在り様にしっかりと心を寄せながら注意深く行うことを求められることになるが、実はこのケアのプロセスそのものの中に、看護のプロセスに不可欠な要素が既に内在している。クライアントとゆったりとした時間を共有し、クライアントに注意を払いつつ経過を共有し、その結果が対話につながる「手を当てるケア」のプロセスは、「共に在る」「寄り添う」「共に歩む」「対話する」といった看護の本質的な要素そのものであり、看護師にとって不可欠な資質でもあるのである。それゆえ「手を当てるケア」を日々実践してゆくことは、看護師個人のケアの資質に働きかけると共に、看護の質をも豊かにし育くんでゆく力を内包していると私は考えている。

またあえて付け加えれば、クライアントの「私」としての存在を物理的に境界付けているのは「皮膚」であるが、この「皮膚」に最適なコンタク

トで働きかけようとする「手を当てるケア」が、結果として看護師とクライアントの最適なコンタクト（関係性）を助けるものと成り得るといふ事実は、私にとって大変興味深い事実でもある。

脚注及び参考文献

- 1) Freies Jugendseminar in Stuttgart: Ameisenbergstr. 44, D-70188 Stuttgart, Deutschland.
- 2) Die Filderklinik: Im Haberschlag 7, D-70794 Filderstadt-Bonlanden, Deutschland.
- 3) 伊藤良子(2005): シュタイナーの湿布療法(その3) 湿—熱湿布・湿—温湿布療法の必要物品とその基本的手順, 京都市立看護短期大学紀要 (30) p.7-14.
- 4) 伊藤良子 (2001): シュタイナーのリズムオイリングの紹介, 京都市立看護短期大学紀要 (26) p.105-109.
- 5) Fortbildungsinstitut des Verbandes anthroposophisch orientierter Pflegeberufe e.V.: Johannes-Kepler-Strasse 19, D-7263 Bad Liebenzell-3, Deutschland.
- 6) Weleda AG: Schwäbisch Gmünd, Zweigniederlassung der Weleda A.G. Arlesheim/Schweiz Möhlerstraße 3, D-73525 Schwäbisch Gmünd, Deutschland.
- 7) Wala Heilmittel GmbH: Dorfstrasse 1, D-73087 Eckwaelden/Bad Boll, Deutschland.
- 8) Sonnenhof: Obere Gasse 10, CH-4144 Arlesheim, Schweiz.
- 9) Gemeinschaftskrankenhaus Herdecke: Gerhard-Kienle-Weg 4, D-58313 Herdecke, Deutschland.
- 10) Vidarkliniken: Inskrivningsenheten, 15391 Järna, Schweden.
- 11) Friedrich Husemann-Klinik: D-79256 Buchenbach, Deutschland.
- 12) Ita Wegman Klinik: Pfeffingerweg 1, CH-4144 Arlesheim, Schweiz.
- 14) Monika Fingado (2001): Therapeutische Wickel und Kompressen-Handbuch aus der Ita Wegman Klinik, Natura Verlag.
- 15) Monika Fingado (2002): Rhythmische Einreibungen, Natura Verlag.